

## 4. セクシュアルヘルス

### ■セクシュアルヘルス全般について

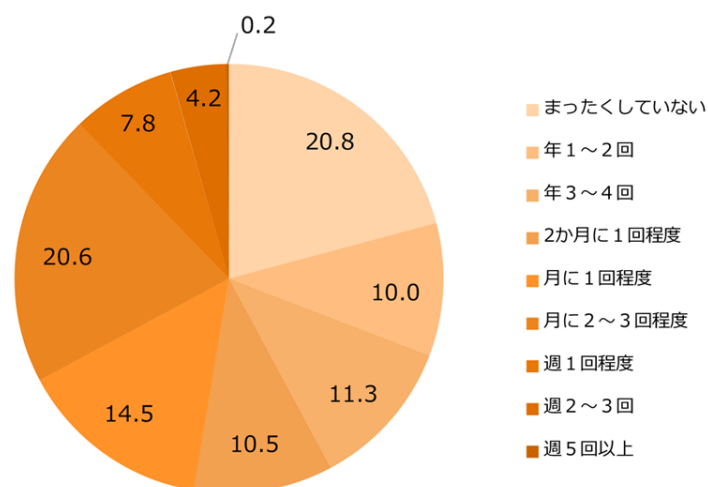
この1年間のセックスの頻度（図 4-1）は、「まったくしていない」が 190 人（20.8%）ともっとも多く、次いで多いのが「月に2～3回」の 188 人（20.6%）であった。

これまで同性とセックスしたことがある人は 844 人（92.4%）であり、その割合を性別で見ると、男性では 95.9%、女性では 12.1%であった。

この1年間のお金にかかわりのあるセックスは「相手にお金を払ってセックスをした」が 95 人（10.4%）、「援助やサポートとしてお金をもらってセックスをした」が 40 人（4.4%）、「セックスや売り専としてお金をもらってセックスをした」が 38 人（4.2%）。

今の性生活に「おおいに／まあ満足している」人は 314 人（34.4%）。それに対し「あまり／まったく満足していない」人の割合は 594 人（65.1%）と、「おおいに／まあ満足している」人の割合の2倍近くに及んだ。

図 4-1 この1年間のセックスの頻度（%、n=913）



### ■特定の付き合っている人・配偶者との関係

特定の付き合っている人・配偶者がいる人は 405 人（44.4%）。そのうち 44 人は相手が 2～5 人と複数であった（405 人中 10.9%、以下同様に原則として 405 人中の%）。主な相手の性別は 355 人（87.6%）が男性。回答者の性別からみると、女性 20 人では相手は全員男性、男性 380 人では 87.9%が相手も男性であった。

その相手との関係についてみると、期間が0年～35年であり、平均値6.7年、中央値5年。相手のHIVステータスは陽性90人(22.2%)、陰性247人(61.0%)、わからない65人(16.0%)。相手は「あなたがHIV陽性であることを知っている」「たぶん知っている」をあわせて346人(85.4%)。これを相手のHIVステータス別にみると、相手が陽性の場合97.7%、陰性の場合89.5%に比べて、陽性か陰性かわからない場合は59.3%と低くなっていた。相手との関係を「今後もずっと続けていきたい」「どちらかというとも今後も続けていきたい」が、あわせると374人(92.3%)であった。

### ■特定の付き合っている人・配偶者とのセックス

(主な)特定の付き合っている人・配偶者とのセックスがこの1年間にあったとする人は236人(全体の25.8%)。セックスの回数は1～300回で、平均値18.8回、中央値10回。

その相手にアナルや膣に挿入される側をしたときコンドームを「必ず使った」「使うことが多かった」人は、挿入されたとする158人中98人(62.0%)。男性に限ってみると、その相手とアナルや膣に挿入する側をしたときコンドームを「必ず使った」「使うことが多かった」人は、挿入したとする131人中82人(62.6%)。特定の付き合っている人・配偶者とのコンドーム使用状況全般について、「これでよいと思う」「どちらかといえばこれ为好いと思う」が当該設問回答者236人中173人(73.3%)であった。

### ■その場限りの相手とのセックス

その場限りの相手とのセックスがこの1年間にあったとする人は542人(全体の59.4%)。セックスの回数は1～620回で、平均値17.8回、中央値6回。年間で50回を超える人も46人いた(その場限りの相手とのセックスがこの1年間にあった542人中8.5%、以下同様に原則として542人中の%)。相手の性別がすべて男性であったのは515人(95.2%)。回答者の性別からみると、女性4人の相手は全員男性、男性では536人中95.1%が相手も男性であった。相手のHIVステータスは「ほぼ全員陽性」12人(2.2%)、「一部陽性」102人(18.8%)、「陽性者はまったくいない」23人(4.2%)、「まったくわからない」403人(74.4%)。相手に陽性であることを「ほぼ全員に」「一部に」伝えた人は146人(26.9%)。これを相手のHIVステータス別にみると、相手がほぼ全員陽性の場合83.3%、一部陽性の場合71.6%、陰性の場合69.6%に比べて、陽性か陰性かわからない場合は11.7%と低くなっていた。

その相手にアナルや膣に挿入される側をしたときコンドームを「必ず使った」「使うことが多かった」人は、挿入されたとする 440 人中 253 人 (57.5%)。男性に限ってみると、その相手とアナルや膣に挿入する側をしたときコンドームを「必ず使った」「使うことが多かった」人は、挿入したとする 359 人中 209 人 (58.2%)。その場限りの相手とのコンドーム使用状況全般について、「これでよいと思う」「どちらかといえばこれでよいと思う」が当該設問回答者 541 人中 293 人 (54.2%) であった。

## ■特定のセックスパートナーとのセックス

特定のセックスパートナーとのセックスがこの1年間にあったとする人は 305 人 (全体の 33.4%) と、特定の付き合っている人・配偶者、およびその場限りの相手と比べると、中間に位置する割合であった。セックスの回数は1~120回で、平均値 13.1 回、中央値 6 回。年間で 50 回以上の方は 19 人 (特定のセックスパートナーとのセックスがこの1年間にあった 305 人中 6.2%、以下同様に原則として 305 人中の%) いた。特定のセックスパートナーの数は 1 人~50 人で、平均値 2.9 人、中央値 2 人。

その相手の性別がすべて男性であったのは 290 人 (95.0%) であった。回答者の性別からみると、女性 3 人のうち 2 人は相手が男性、男性では 300 人中 95.7% が相手も男性であった。相手の HIV ステータスは「ほぼ全員陽性」31 人 (10.2%)、「一部陽性」68 人 (22.3%)、「陽性者はまったくいない」47 人 (15.4%)、「まったくわからない」159 人 (52.1%)。相手に陽性であることを「ほぼ全員に」「一部に」伝えた人は 162 人 (53.1%)。これについても、相手の HIV ステータス別にみると、相手がほぼ全員陽性の場合 96.8%、一部陽性の場合 85.3%、陰性の場合 83.0% に比べて、陽性か陰性かわからない場合は 22.3% と低くなっていた。

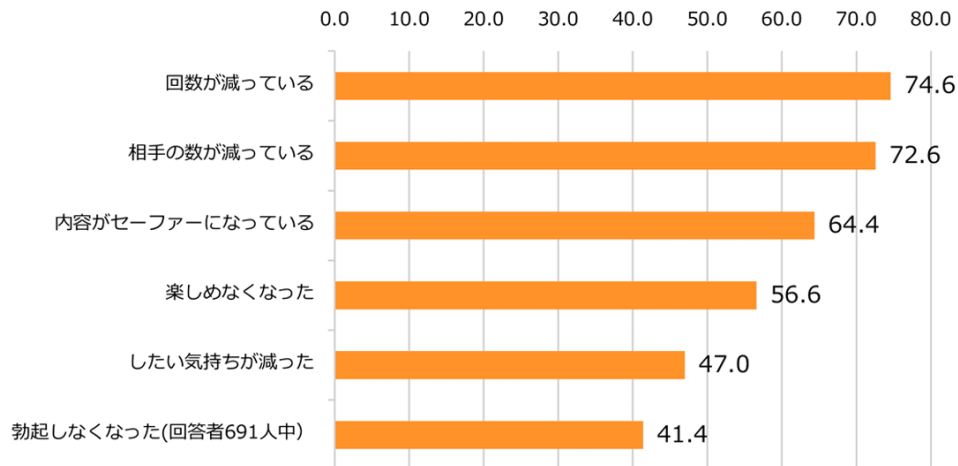
その相手にアナルや膣に挿入される側をしたときコンドームを「必ず使った」「使うことが多かった」人は、挿入されたとする 236 人中 124 人 (52.5%)。男性に限ると、その相手とアナルや膣に挿入する側をしたときコンドームを「必ず使った」「使うことが多かった」人は、挿入したとする 188 人中 109 人 (58.0%)。特定のセックスパートナーとのコンドーム使用状況全般について、「これでよいと思う」「どちらかといえばこれでよいと思う」が当該設問回答者 304 人中 197 人 (64.8%) であった。

## ■HIV 陽性とわかる以前と比べた今のセックスの状況

HIV 陽性とわかる以前に比べての今のセックス状況についてたずねたところ (図 4-2)、回数がかなり/少し減っている人は 681 人 (全体の 74.6%)、相手の数がかなり/少し減

っている人は 663 人 (72.6%) であった。男性に限っては、まったく／やや勃起しなくなった人は 286 人 (41.4%) であった。

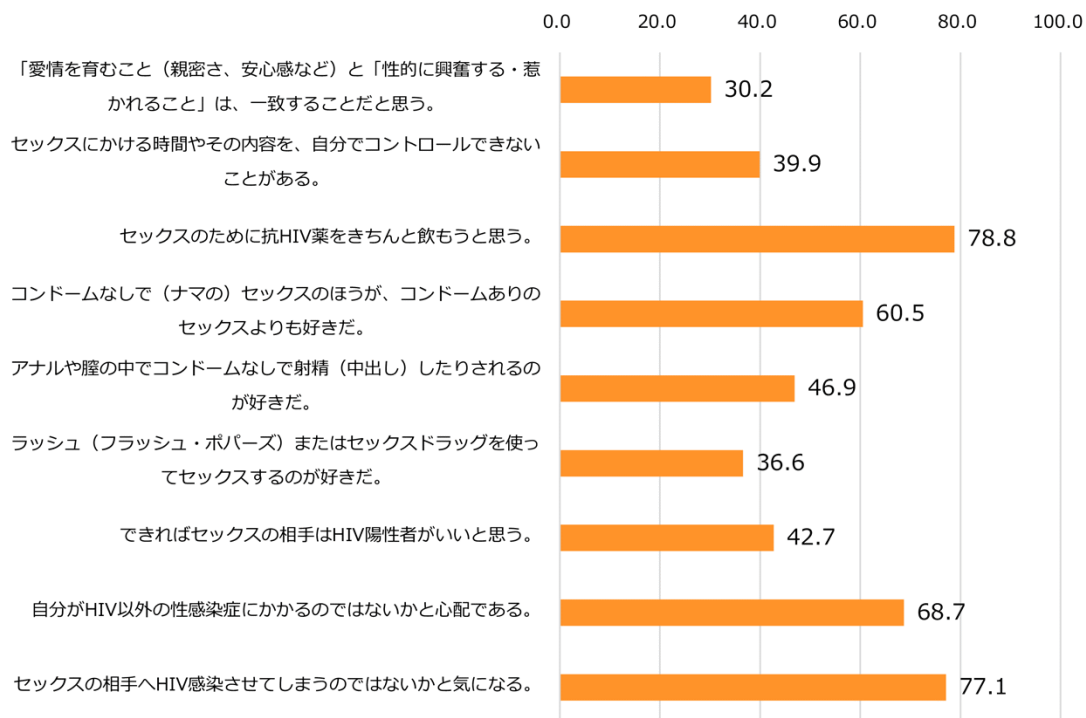
図 4-2 HIV 陽性とわかる以前と比べた今のセックスの状況 (%、n=913)



#### ■セックスについての考え

図 4-3 のように、セックスのために薬をきちんと飲もうと思っている人や、セックスの相手への HIV 感染を気にしている人が各々8割近くにのぼっていた。

図 4-3 セックスについての考え (%、n=913)



#### ■セックスに関連した諸経験：性感染症・経済面・薬物等

これまでに罹患したことがある性感染症として1割以上があげたものを多い順に並べると、毛じらみ 284 人 (31.1%)、梅毒 278 人 (30.4%)、B 型肝炎 191 人 (20.9%)、尖圭コンジローマ 147 人 (16.1%)、淋病 106 人 (11.6%)、尿道炎 99 人 (10.8%) であった。

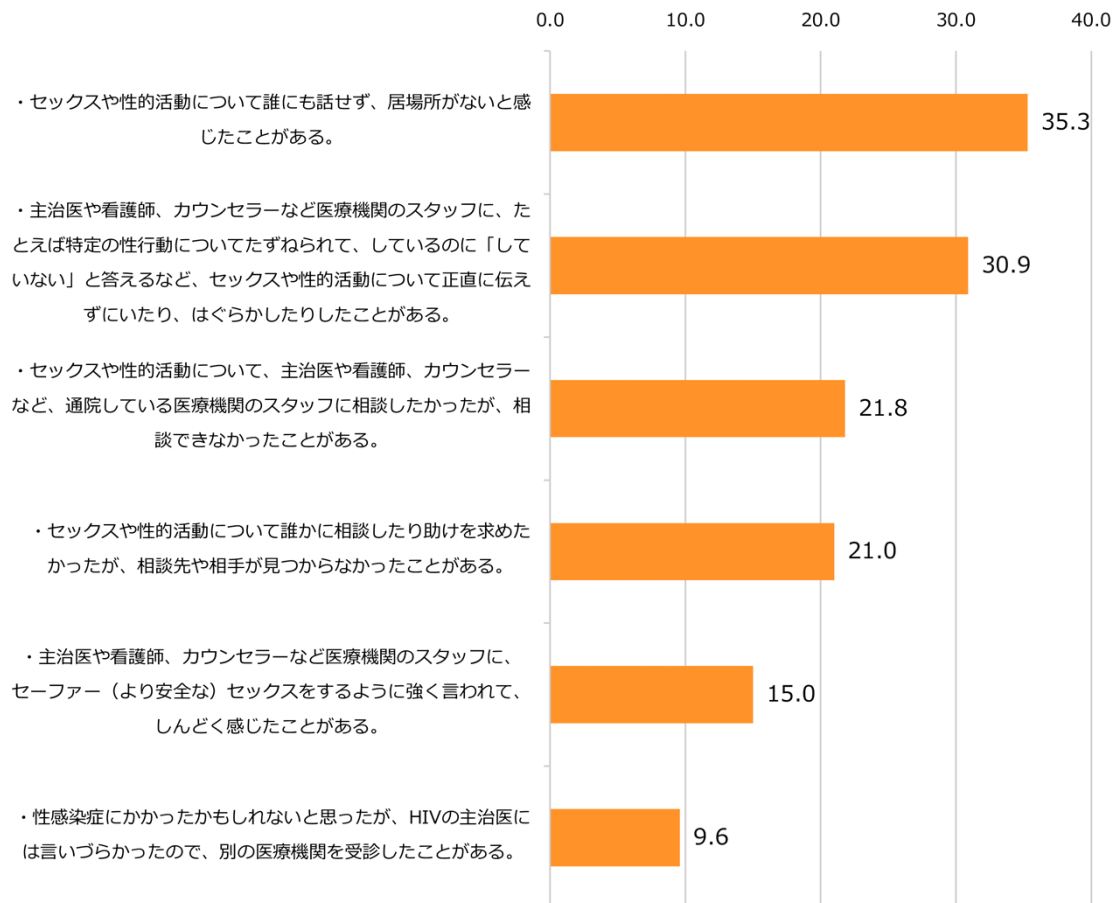
これまでに、風俗通い、有料動画、ハッテン場通いなど（薬物以外で）セックスに関連した出費のために経済的に極めて苦しくなったことがある人は 138 人 (15.1%)、セックスや性的活動が理由で仕事や学業で支障をきたしたことがこれまでである人は 138 人 (15.1%)、セックスや性的活動により家族やパートナー、友人との関係が悪くなったことがある人は 176 人 (19.3%) であった。

過去 1 年間に、セックスのために使ったことがある薬物・お酒・勃起薬は、多い順に、バイアグラ等勃起薬 212 人 (23.2%)、ラッシュ・フラッシュなど亜硝酸アミル類 186 人 (20.4%)、お酒・アルコール 183 人 (20.0%)、ハーブ・リキッドなど脱法ドラッグ 92 人 (10.1%)、覚せい剤 37 人 (4.1%)、エアダスター・スプレー・ガス 21 人 (2.3%)、5MeO-DIPT が 11 人 (1.2%) であった。

## ■セクシュアルヘルスについての相談

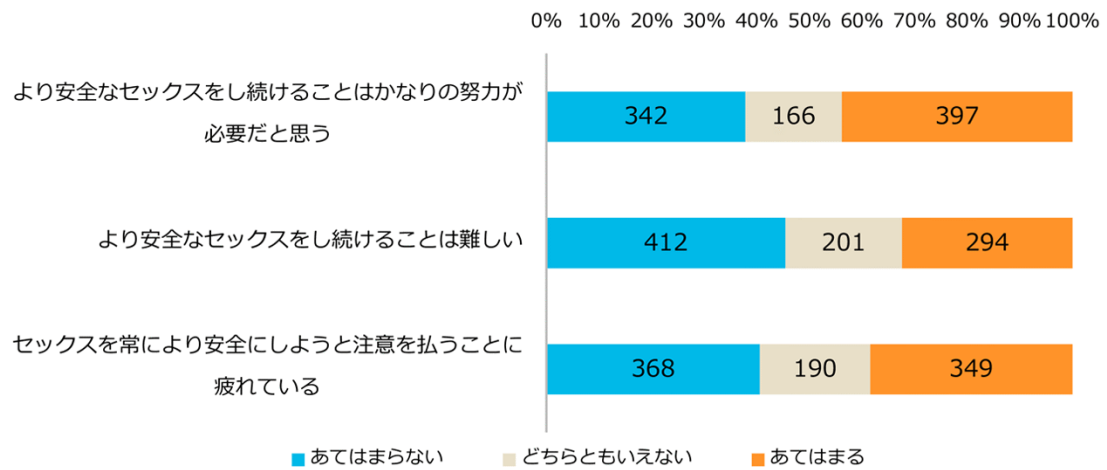
図 4-4 に示すように、過去 1 年間に、セックスや性的活動について誰にも話せず居場所がないと感じたことがある人は 322 人 (35.3%)、主治医や看護師など医療機関のスタッフにセックスや性的活動について正直に伝えずいたりはぐらかした経験がある人は 282 人 (30.9%) を占めた。「性感染症にかかったかもしれないと思ったが、HIV の主治医には言いづらかったので、別の医療機関を受診したことがある。」も約 1 割存在した。

図 4-4 セクシュアルヘルスについての相談 (%、n=913)



セーフターセックスの疲労感 (fatigue) について「セーフターにしようと注意を払うことに疲れている」「セーフターセックスをし続けることは難しい」「セーフターセックスし続けることはかなりの努力が必要」の 3 項目で尋ねたところ (図 4-5)、各々 3~4 割の人が「あてはまる」とし、安全なセックスを行い続けることに関して疲労感を感じていた。

図 4-5 セーフターセックスの疲労感(fatigue) (人)



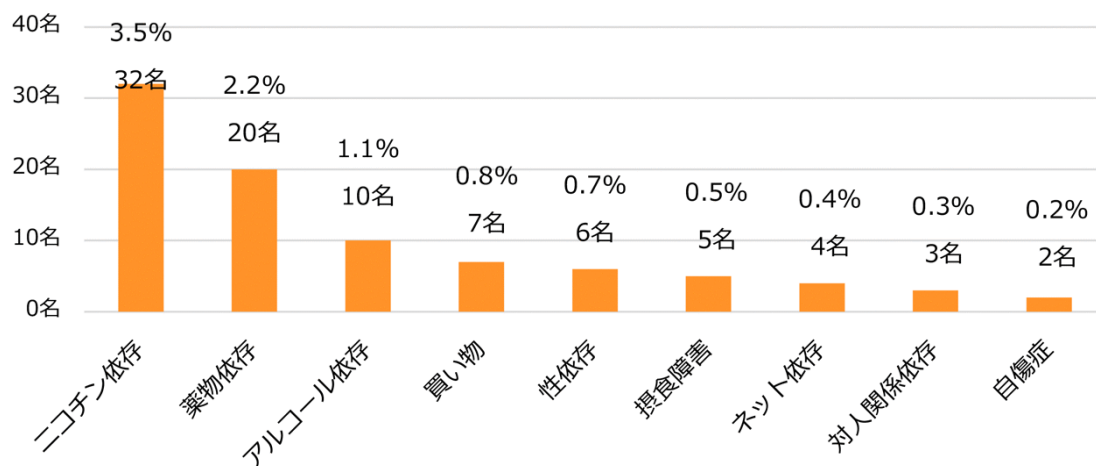
## 5. アディクション

### ■医師に診断されたアディクションについて

何等かのアディクション（依存症）であると医師から診断されている人は 85 人（9.3%：参加者全体の%、以下同様）であった。診断されたアディクションの種類のうち、最も多いものから順に、ニコチン依存 32 人（3.5%）、薬物依存 20 人（2.2%）、アルコール依存 10 人（1.1%）、であった（図 5-1）。これらの依存症を重複して発症している状況については、2つが 11 人、3つが 1 人、6つが 1 人であり、ほかは単独で発症していた。

なお、診断されていないものの、自分自身がそうではないかと感じている依存傾向の種類で高い頻度でみられていたものは以下の順である。インターネット依存 277 人（30.3%）、ニコチン依存 228 人（25.0%）、性依存 219 人（24%）、買い物依存 215 人（23.5%）、ギャンブル依存 78 人（8.5%）、アルコール依存 75 人（8.2%）、摂食障害 71 人（7.8%）、ゲーム依存 66 人（7.2%）、薬物依存 64 人（7.0%）、恋愛依存 60 人（6.6%）。

図 5-1 医師から診断された依存症の種類と人数



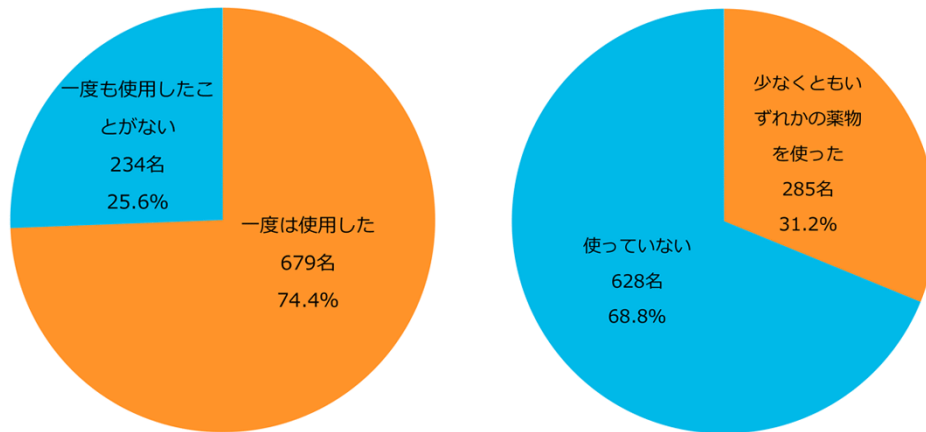
### ■何らかの興奮、落ち着き、強い幸福感、幻覚などをもたらす薬物使用の実態と種類

これまでに、何らかの興奮、落ち着き、強い幸福感、幻覚などをもたらす薬物や物質を使ったことがないと述べた人は 234 人（25.6%、参加者全体の%、以下同様）にとどまった。また、過去 1 年の間に、脱法ドラッグ・合法ドラッグ、ラッシュなどの亜硝酸アミル系、覚せい剤、5MeO-DIPT、大麻、MDMA、LSD、マジックマッシュルーム、ヘロイン、コカイン、有機溶剤、エアダスター・スプレー・ガス、医療用医薬品（リタリン・ケタミ



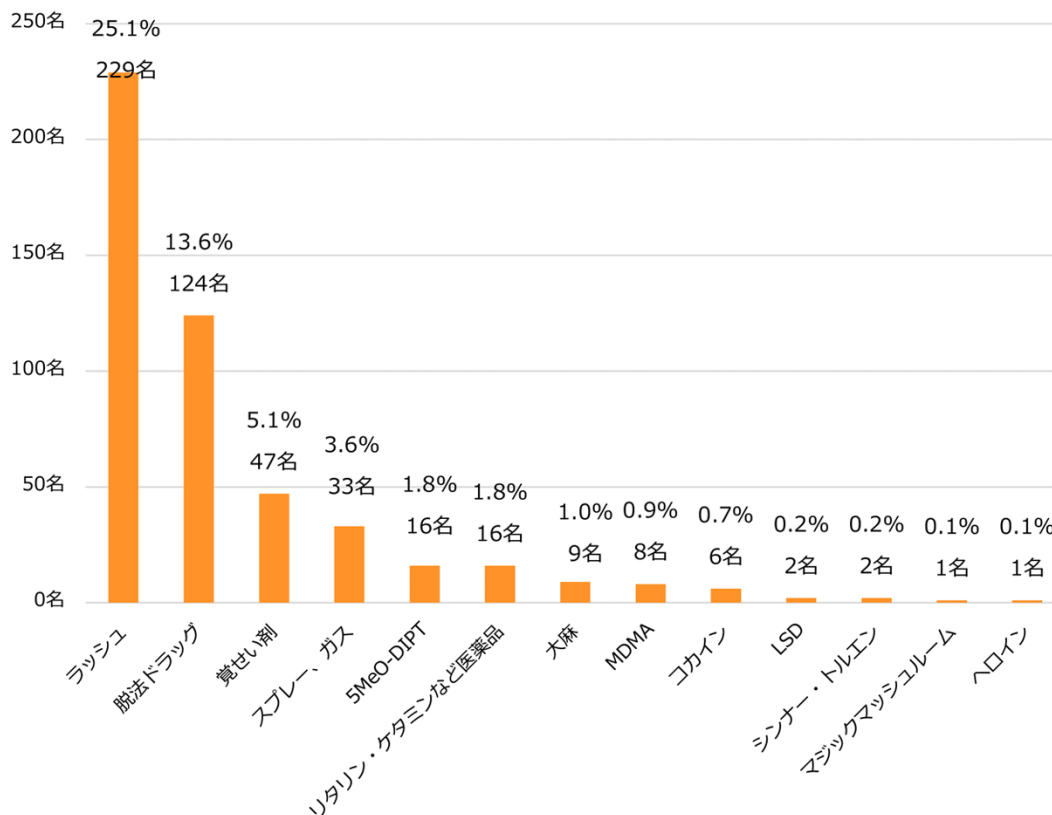
ンなど)のうち、いずれかを使用したことがある者は285人(31.2%)であった(図5-2)。

図5-2 これまでの薬物使用経験(左)と過去1年間の薬物使用状況(右)



これまでに使ったことがある薬物の種類は多いものから順に以下のようであった。ラッシュなどの亜硝酸アミル系 635人(69.6%)、脱法ドラッグ(ハーブ・リキッド・錠剤など)・合法ドラッグとして売られているもの 352人(38.6%)、5MeO-DIPT344人(37.7%)、エアダスター・スプレー・ガスの吸入 183人(20.0%)、覚せい剤 154人(16.9%)、大麻 143人(15.7%)、MDMA82人(9.0%)、医療用医薬品(リタリン・ケタミンなど) 62人(6.8%)、LSD46人(5.0%)、有機溶剤の吸入 42人(4.6%)、コカイン 41人(4.5%)、マジックマッシュルーム 34人(3.7%)、ヘロイン 24人(2.6%)。過去1年間の使用状況は図5-3に示す通りである。

図 5-3 過去 1 年間に使用した薬物の種類と人数



薬物を使用した際にすでに HIV 陽性であることが分かっていたかどうかについて、わかっていたという人は 74 人で、わかっていなかったと述べた人は 535 人であった。また、本項目に回答した者 (609 人 (66.7%)) のうち、はじめて薬物を使った時期については、3 年以内 73 人 (8.0%)、4~9 年前 162 人 (17.7%)、10~19 年前 285 人 (31.2%)、20 年以上前 92 人 (10.1%) であった。

#### ■どのような時に薬物を使いたくなるのか

何らかの興奮、落ち着き、強い幸福感、幻覚などをもたらす薬物について、どのような時に使いたくなるのかについて、頻度順に度数および% (これまでに使ったことがあるとみられる 679 人における%の値) を示していく。(1位)セックスをするとき 480 人 (70.7%)、(2位)一緒に使う人がいるとき 277 人 (40.8%)、(3位)すすめられたとき 273 人 (40.2%)、(4位)マスターベーション (自慰行為) をするとき 236 人 (34.8%)、(5位)淫らな気分になったとき 145 人 (21.4%)、(6位)強いストレスを感じたとき 79 人 (11.6%)、(7位)休日 54 人 (8.0%)、(8位)物事がうまくいかないとき 47 人 (6.9%)、(9位)イライラしたとき 35 人 (5.2%)、(10位)クラブに行くとき・行ったとき 34 人 (5.0%)、(10

位) いつのまにか 34 人 (5.0%)。表 5-1 に詳細を示す。

表 5-1 薬物を使用する機会の分布

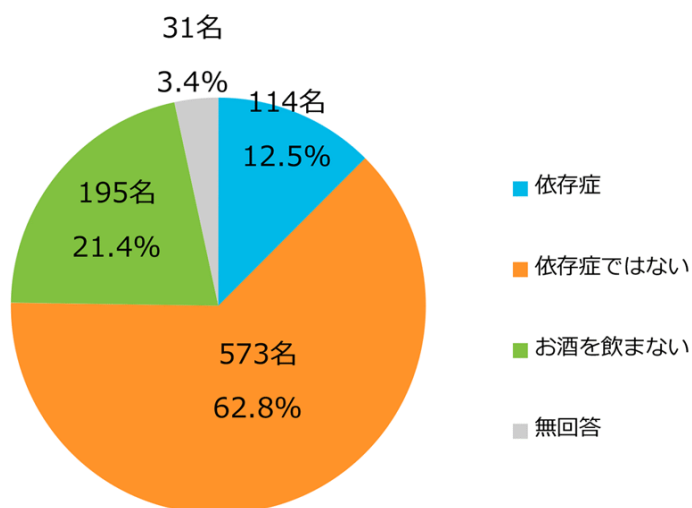
	人数	%		人数	%
セックスをするとき	480	70.7	何かに挫折したとき	33	4.9
一緒に使う人がいるとき	277	40.8	つまらないと感じたとき	33	4.9
すすめられたとき	273	40.2	一人になったとき	32	4.7
マスターベーション (自慰行為) をするとき	236	34.8	疲れているとき	28	4.1
淫らな気分になったとき	145	21.4	お酒を飲んだとき	19	2.8
強いストレスを感じたとき	79	11.6	パーティのとき	18	2.7
休日	54	8.0	その他	17	2.5
物事がうまくいかないとき	47	6.9	仕事や勉強に弾みをつけるとき	11	1.6
イライラしたとき	35	5.2	音楽を聴くとき	10	1.5
クラブに行くとき・行ったとき	34	5.0	正月やクリスマスなど世間で年中行事がされる時期	10	1.5
いつのまにか	34	5.0	物事がうまくいったとき	8	1.2
仕事のプレッシャーを感じたとき	33	4.9	何か自分にとって重要なことを決めざるを得ないとき	8	1.2

## ■ アルコール依存傾向について

久里浜式アルコール症スクリーニングテスト (KAST) を用いた。これは、全 14 問の質問を通じて、各質問の回答に得点を割り当てることで、アルコール依存症患者 (重篤問題飲酒群)、その傾向がある者 (問題飲酒群)、注意が必要な者 (問題飲酒予備軍)、正常飲酒者、のそれぞれを判定するものである。まず、最近 6 か月間にお酒を飲んだという人は 717 人 (78.5%) で、そのうち KAST を回答したのは 687 人であった。次に、判定の結果は、正常飲酒者は 374 人 (54.4% : KAST 回答者 687 人における%、以下同様) で、問題飲酒予備軍に該当する者は 169 人 (24.6%)、問題飲酒群は 30 人 (4.4) %。重篤問題飲酒群は 114 人 (16.6%、全体のなかでは 12.5%) であった (図 5-4)。参考までに、厚生労働省

が行った全国調査<sup>10</sup>では、この KAST を用いたアルコール依存症患者の割合（KAST の重篤問題飲酒群に相当）は、男性の 7.4%、女性の 1.5%と推定された。

図 5-4 今回の調査でのアルコール依存症者の割合 (KAST による)



#### ■当事者ミーティング、12ステップ、心理療法

NA（薬物依存症者の集まり）や AA（アルコール依存症者の集まり）など、依存症当事者のミーティングや自助グループについて、「依存症当事者のミーティングや自助グループがあることを今初めて聞いた」人は 209 人（22.9%、全参加者における%、以下同様）、「当事者として参加したことがある」人は 30 人（3.3%）、知っているが参加したことはない人は 659 人（72.2%）であった。

「12ステップ」とは、アルコールや薬物など様々な依存症の患者が共通して、回復に向かって行動するための指針のことで、多くの当事者ミーティングや回復施設において取り入れられている。この「12ステップ」について、「12ステップという言葉は今初めて聞いた」は 764 人（83.7%）、「12ステップすべて取り組んだ」11 人（1.2%）、「12ステップの一部に取り組んだ」17 人（1.9%）、「12ステップを知っているし、取り組む必要があると思っているが、実際には取り組んだことはない」20 人（2.2%）、「12ステップを知っているが、自分には取り組む必要がないので、実際には取り組んだことはない」93 人（10.2%）であった。

<sup>10</sup>厚生労働省「成人の飲酒実態と関連問題の予防に関する研究」（主任研究者 樋口進）報告書 <http://www.mhlw.go.jp/topics/tobacco/houkoku/061122b.html>

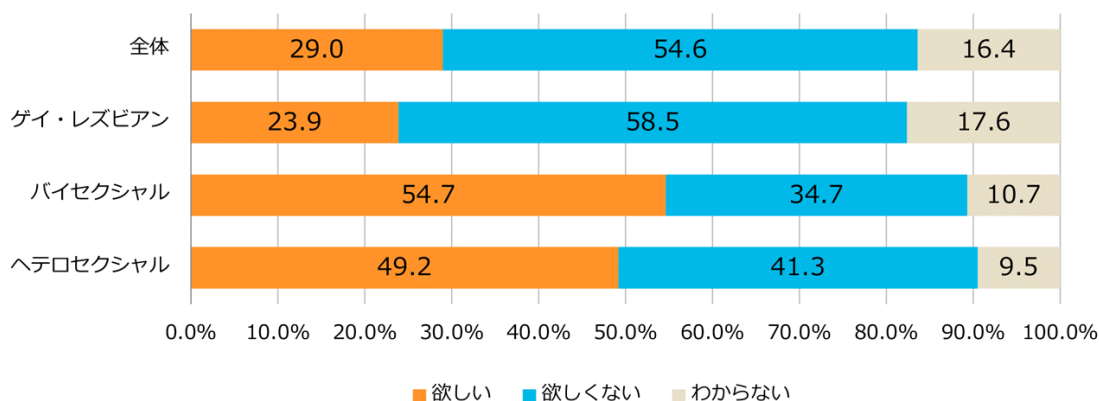
認知行動療法などの心理療法については、「心理療法という言葉は今初めて聞いた」人は373人（40.9%）、「受けたことがあるし、今も受けている」14人（1.5%）、「受けたことはあるが、今は受けていない」32人（3.5%）、「心理療法を知っているし、受ける必要があると思っているが、実際には受けたことはない」58人（6.4%）、「心理療法を知っているが、自分は受ける必要がないので、実際には受けたことはない」426人（46.7%）であった。

## 6. 子どもを持つことについて

回答者 913 人のうち、子どものいる陽性者は 56 人 (6.1%) であり、そのうち、妊娠前に HIV 陽性が判明している上で、妊娠・出産したものは 15 人 (26.8%) であった。

また、子どものいない陽性者 854 人のうち 248 人 (29.0%) は、今後、自分の子どもを欲しいと考えていた。自分の子どもを欲しいとする人を、回答者の性別でみると、男性 27.5% (823 人中 226 人)、女性 67.9% (28 人中 19 人) であった。またセクシュアリティ別では、ヘテロセクシュアル 49.2% (63 人中 31 人)、ゲイ・レズビアン 23.9% (699 人中 167 人)、バイセクシュアル 54.7% (75 人中 41 人) が、自分の子どもを欲しいと回答していた (図 6-1)。

図 6-1 子どものない陽性者のうち、「子どもを欲しい」と考えている割合  
(%、全体:n=854 ゲイ・レズビアン:n=699 バイセクシュアル:n=75 ヘテロセクシュアル:n=63)



しかし、子どものいない陽性者のうち、人工妊娠等の方法で、陽性者でも自分の子どもを持つことができるという十分な知識を持っていたものは 18.5% であった。また、子どもを欲しいと考えている陽性者においても、その割合は、24.2% (248 人中 60 人) であった。

また、子どものいない陽性者のうち 25.6% は、子どもを持つことについて医療スタッフから相談・情報提供を受けたいと考えていた (図 6-2)。その希望する内容は、「子どもへの HIV 感染」18.7%、「子どもが感染した際の治療・予後」11.9%、「抗 HIV 薬の子どもへの影響」11.6%、「人工妊娠等に伴う母体への負担」12.6% など、出産に伴う母児への影響についての内容が多かった。しかし、実際の医療現場で、医療スタッフとの相談・情報提供を受けた経験のあるものは、わずか 10.0% にとどまった (図 6-3)。医療スタッフとの相談・情報提供を受けた経験のあるものを、回答者の性別でみると、男性 8.9% (823 人中 73 人)、女性 42.9% (28 人中 12 人)、セクシュアリティ別では、ヘテロセクシュアル 20.6% (63 人中 13 人)、ゲイ・レズビアン 7.4% (699 人中 52 人)、バイセクシュアル 20.0%

(75人中15人)であり、男性あるいはゲイ・レズビアン陽性者において相談・情報提供の機会が、極めて少ない傾向がみられた。

図 6-2 医療スタッフより相談・情報提供を受けたいと考えている割合(%、n=854)

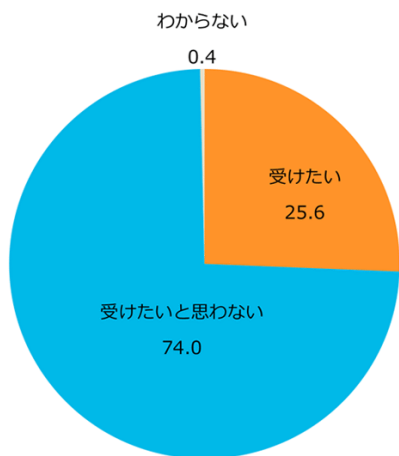
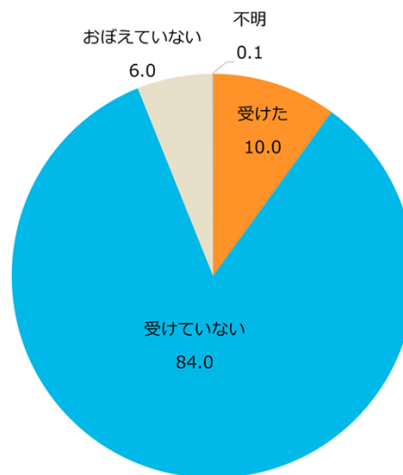


図 6-3 医療スタッフより相談・情報提供を受けた割合(%、n=854)



子どものいる陽性者に子どもを持つことに興味のある陽性者へのメッセージ(自由記載)を求めたところ、「子どもがほしいというのは当然の思いです。サポートもあるので、決断してしまえば何とかできます。」「まずは医療機関のプロに相談することが一番の解決法です。」「産めると思います。」「出産はゴールではなくスタートだから、環境はなるべく整えておいた方が良く思う。」「諦めずに前向きに頑張ってください。」「陽性者だから…と、苦労や心配はない。自分は、子どもがいたことで、人生は豊かになったと思う。」「子供が居ると、生きる喜びが増します。」「生き甲斐になります。」など、子どもを持つことに過度の不安を抱かず、陽性者が前向きに検討できるような、励ましのメッセージが多数寄せられた。